

「では、頂くとしようか」
ダヌアちゃんの綺麗なスリットに
チンコをあてがう
ぐぐぐ、とおしつけると
いくらか反応している

ん、寝ているとはいえ、
感じて興奮しようだ
かえつて興奮を煽るといふものだ
そのまま亀頭の先がダヌアちゃんの
オマシコを押し広げ侵入していく

グニッ

グググ

チンチン...

ん...ん...



ん……ふう！

少し、大きな声が出た
ガッツリと押し込んだので
さすがに反応したか
構わずチンコでタヌアちゃんを
押し広げ合体した

ドググググ！！



ん…あー？

ダヌアちゃんの目がこちらを見てる
おつと起きてしまったようだ
構わず大きな胸を揉みしだき、
チンコを前後にピストンさせた

あう…あつ…
あー？あつ…

びん

ずん

ずん

ダヌアちゃん、気持ちいいだろう、
これがセックスだよ

せ、せつくう？ん…ああ…

一緒に気持ちよくなるう
少なからず、ダヌアちゃんも
気持ちよくなっているせい
抵抗はされなかった
フン、俺のチンコのおかげだな

ぐいぐいとチンコを
子宮まで押しこむ
少し、キツイようだ
苦しそうな表情をしている

イクよ…ダヌアちゃん！
イクーイクー！

シューッ
シューッ

んっ
あっあっあっ
あっあっあっ
あっあっあっ

ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ



ダヌアちゃんの子宮を精液で満たす
じゅくじゅくした精液の感触で
ダヌアちゃんの表情を恍惚としてくる

ふう……うん……んっ……
ああう……お腹のなか……
なにか……入っ……てくる……う

これがセックスだよ
ダヌアちゃん

びん

ん

びん

セックス……？
気持ちよかつたろ？
うん……ぽかぽかして……キモチ……
す……

ん

ぬるり：とチンコを引き抜くと
ごぼごぼと精液が
オマンコから溢れ出てきた
やつすげー出してた

ぶぶぶ

ぶぶぶ

方針してとろ〜んとしている
ダメア、オマンコから白い液体が溢れ出てくる

はあ：はあ：
なんだか：ふわふわ：するう：

んー



近くで見るとホントに
大きなおっぱいだ

「スウ…スウ…」

気持ちよさそうに寝ているな
顔を近づけると寝息が聞こえる
少女特有の甘い匂いが漂ってくる

パラリ…

水着をはぎ取るとおおきな
おっぱいが姿をあらわす

寄せていた乳房が重力に
おっぱいが広がると重力に
逆らって保たれる形を保つ

唇をふにふにと遊んでみる
柔らかい唇だ

しゅっ
しゅっ

チンコで遊んだらさぞ気持ちいいことだろう
と考える内にチンコを取り出して舌に当ててみる
柔らかい舌先と亀頭がキスをはじめめる

クニ、クニ

「アレ…ダヌアちゃん
美味しいチンロコだよー」
「スウ…スウ…」

しゅん

しゅん

たまらなくなってきたので
クチに突っ込んだ
くちゅ、くちゅ
「うーん、いい顔をしている」
ダヌアちゃんクチまんこを犯す

ぽかぽか…

ドロ…

「ダヌアちゃんに気持ちのよさを
目覚めを提供しようと思っただね」
「きもち…うん」
「おなか…ぽかぽか…するら…」

「これは精液の…うんだよ」
「せい…えきつ…」
「はむ…」
「手にとって舐めてみると」
「にが…うう」
「苦くないよ」
「おいしいよ」



「ほら、こうやって」
挿入する

「あう……」
びゅるつと射精する

ズン!

「どうだい、美味しかったろう」
「うん……じんじんふわふわするけど……これ……好き……」

「そのうち赤ちゃんもできるけど」
「一緒に育てようね」
「うん……」
ぽおつと顔をあからめる

あーあー



「ダヌアちゃん
こんな夜中に出歩いてバナナかい」

「あーうう……うん……」

お腹が空いてるのかな



「ばな…なあ…」

(うーんなかなかいいお尻だ)
手を届かせようとしてふらふらと揺れるお尻を見てみると
昼間のセックスのことが思い出されてまたムラムラとしてきた
そんな俺の気持ちもつゆと知らず、
ダヌアはバナナに手を伸ばそうとしている
ドラフ族の身長ではバナナを取るのも一苦労といったところだ
俺が取ってやりバナナを渡す

「ばな…なあ…」

「しゃくつ」
ダヌア、バナナを食べる

「しゃくつ」

「しゃくつ」

なんとなく気になったのでスカートをめくってみた
案の定、ノーパンだったので、
スカートの下からおまんこがお披露目される
俺が綺麗なスリットをガン見しているが、
ダヌアはバナナに夢中だ

あーん



ギンギンに勃起していたので
このまま入れてやることにした



ははははは

はははははははははははははははは

ズブズブ

チンコを挿入させる

「ばばな...なあ...」

「どうだ？俺のバナナも旨いだろう？」

ダヌアは抵抗する様子もなく、瞳はうるうるとして頬も紅潮してきている

「あう...あ...ああう」

どうやらどっちのバナナも食す気マンマンのようなので前後にピストン運動を開始させてやる

「あっあっ...んっあっ」
「ばばな...ああっ」

ズブズブ...

ん…は…ん…

そうこうする間に中に出してやった
ビクビクと下半身がけいれんさせるダヌア
ダヌアも絶頂をむかえたようだ
気持ちよさそうにトロ顔になって震えている

「ばな…なば…溢れてるう…」

「んっ」

ゴッ

どぷどぷと白濁液がダヌアの
オマンコから溢れ出していた

「あん…んあっ…あっ」

「ダヌアもセックスがだいぶ好きになってきたな」

あーん！

あーん！

南国の島で人目を気にせず、俺達は昼も夜もセックスをしまくっていた
ダヌアのマンコもすっかり俺のチンコの形になってしまっただろう
ダヌアは俺の体の上で尻をぷりぷりしながら腰を振っている

「あっこれっ…すぎ…すぎい…あっ」

ぬっ！
ぬっ！
ぬっ！
ぬっ！
ぬっ！
ぬっ！



ドラフの豊満なおっぱいを騎乗位で眺めるのは壮観だ

「それ、ダメア出すぞっ！」

「ん、出して…びゆるびゆる…」
「欲しい…んっ」

「あっ」

どくどくと精液を流し込んでやる
散々中出ししたからもう孕んでいることだろう
それでも互いに体をむさぼることをやめる気も無い

ド

ン

「はあはあ…せいえき…熱い…」
「お腹がぼかぼか…」

子宮で熱い精液を感じるのがダヌアのお気に入りのようなのだ
怒張したチンコをずっと味わうようにビクビクと体を震わせながら
じっと俺の体にしがみついている

はあー！

はあー！

「どれ、今日は少し趣向をかえてやろうか」



服を剥ぎ取ると豊満なおっぱいが顔をみせる
乳首には金色のリングをしこんでやった

「あん……」

普段と違うオシャレした乳首を
お披露目されてダヌアは少々戸惑いの色を隠せない



ぐいと引っ張ってやるとおっぱいの形がのびやかに変形する

「いい眺めだぞダヌア」

「あつ…んっ」

「おっぱい…すきっ」

「ああ、男は皆おっぱいが好きだ」

「ダヌアもおっぱいをいじられるのが好きだろう？」

「うん、おっぱい…ダヌア…いじられるの…すきっ」



強く引き、ゆるめ、また引く
おっぱいが縦横無尽に形をかえる
そうこうする間に俺の方もふたたび高まってきたので
下からズンズンとつきあげてやるとダヌアが再びよがりはじめた

「あっあつやつ今……うごいちゃ……」
「んっおっぱいちぎれちゃ……う」

「ちぎれやしなさいよ」

戸惑うダヌアが可愛くてもますますエロクドしてきた



「フリス」

抜かずの2発めを発射
ダヌアの中に流し込んでやった

「んーびゆるびゆるうーぶうーぶ」



「いい顔だったぞダヌア」

「うん、私も…気持ちよかった…」

恍惚としているダヌアに
やさしくキスしてやった



毎日やりまくってたので、
ダヌアのお腹もすっかり大きくなった

「あら、……ん？……も？」

「そう、俺とダヌアの子供だ」

「ん？……」

ダヌアはそう言われると
嬉しそうに微笑んだ。
南国の夕日がダヌアの
頬を照らしていた